

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：17104

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652171

研究課題名(和文) 17-19世紀インドにおけるイギリス植民都市の比較社会史研究

研究課題名(英文) Comparative Social History of British towns in 17-19th century India

研究代表者

水井 万里子(MIZUI, Mariko)

九州工業大学・工学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号：90336090

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、イギリスが建設したインドにおける植民都市の歴史的な形成過程を、一次史料を用いて明らかにした。この過程で、オランダの植民都市も比較の対象として検討した。特に、都市が諸チャーターにより法人格を付与され統治領域を確定していく点に注目し、17世紀後半のマドラス、ボンベイを中心に検討した。その成果は、研究書、実証論文の発表に加え、平成26年度に出版予定の2冊の論文集に論文の形で発表される予定である。この結果、植民都市とその外部世界の境界領域における社会史的問題の検討が今後の課題となり、特にEIC期と帝国期の史料の関係性が史料論として確立されるべき論点として剔抉された。

研究成果の概要(英文)：This research explored that the historical process of the towns in India which were established by the English East India Company (hereafter EIC) using the Company records as the primary sources. In this work, the towns settled by the Dutch East India Company were also dealt with for the comparative study. Focusing on the aspect which the towns made their governing area clear by being granted the charters from the English Crown or Mughal Empire, this research discussed the cases of the towns of Madras and Bombay in the 17th century. The outcome of this research will be published as several articles in the two edited books by the end of March 2015. It drew the issues for the next research project, namely the nature of social history in the boundary of the towns planted by European Companies. It is also significant for the next research to learn how the various primary sources both in EIC period and in the Colonial period, connected.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：イギリス東インド会社 植民都市社会史 イギリス帝国 法慣習 境界領域

1. 研究開始当初の背景

(1) インド亜大陸における都市、カルカッタ、ボンベイ、マドラスの歴史研究は、イギリス東インド会社による「管区」(植民都市)時代と、イギリスによる植民地支配下の帝国都市という二つの視角から進められてきたといってもよい。これらの都市における様々な社会史的事例は帝国期における「支配と従属」という枠組で論じられ、先行する東インド会社管区期においてさえ「白人対現地住民」「文明対未開」といった単純な二分法によって解釈され歴史が叙述されることが多かった。帝国期における都市の史的状況は、プランテーションの社会とあわせて「イギリス帝国の植民地社会史」として解釈されがちである。

(2) 植民都市の場合は 19 世紀後半に入っても相対的に少数の白人人口とそれを取りまく数多の現地住民が「都市」という限られた空間に、住み分けがあったにせよ共生していたのである。問題の所在は、「植民都市」という空間が、無批判に「植民地」という広大な領土の問題として語られることにあるといえる。この問題に関してはバタフィアを対象とする布野修司等の建設工学系の研究成果により「植民都市」の論点が提唱されてきている。しかし、植民都市の起源であるイギリス東インド会社やオランダ東インド会社による都市建設と植民事業について詳しく実証的に分析した歴史学からのアプローチは H.ファーバーや P.J.マーシャルの著作を除き極めて少ない。

(3) 研究代表者はこれまで比較都市史研究会、国際商業史研究会のメンバーとして 20 年以上にわたり近世近代イギリス都市史と、都市商人層の商業・政治活動を中心に研究してきた。2005 年度から東インド会社史料を用いてイギリス商人の鉱物資源の市場開拓について研究を公刊し、東インド会社史研究に取り組んでいる。この間東洋史研究者とともにインド洋やユーラシアを対象とする共同研究に参加する機会に恵まれ、本課題の連携研究者となるイギリス帝国史の水谷智、研究協力者となる前近代西南アジア史研究者和田郁子と、三者三様の研究分野を超越した「植民都市の長期の社会史」について研究を構築しようという目的を共有した

2. 研究の目的

(1) 植民都市における白人社会と現地人社会の混交・分離の問題について、社会史的な視点から長期的変容(17 世紀から 19 世紀末)に焦点をあてて実証分析することにある。東インド会社史、イギリス帝国史、前近代西南アジア史の三様の立場にある研究者が共同・越境する形で分析・議論しあい、お互いの資史料・文献の情報を共有できるよう、17 - 19 世紀「ボンベイ、カルカッタ、マドラス、

プリカット」の 4 市に関わる在ヨーロッパの史料について合同調査し、お互いの研究領域を超えた新たな史実発見の基盤を構築する。

(2) 東インド会社管区期の植民都市の「職業」「教育」「言語」に関する方針が、会社によってどのように定められたのか、その実践過程を明らかにしつつ帝国期の諸議論に東インド会社管区期からの継続性と変容の両面の検討を促すことにある。ここから行政都市カルカッタと商都の要素が強いボンベイの相違点、都市としては成長を止めて衰退期に向かうプリカットと勃興するマドラスの対比的状況、それらの要因などが本課題で実証的に明らかにされる。

(3) 植民都市の社会史を実証解明していくことで、本課題はさらに大きな成果を視野に入れることができる。ポスト・モダンの植民地史研究の成果から、18 世紀以降西洋社会が人種や身分、教育水準、性差など、社会的なカテゴリー化を推し進めていくことが明らかになって久しい。インドの植民都市においては、その最も濃縮された状況が展開していたと考えてもよい。本課題において、職業についての白人と非白人のカテゴリー化、孤児や混血児の教育における格差、言語能力による人の差別化といった問題がいつ表面化し、制度化が行われていくのかを見極めることが、近世近代西洋社会の本質的な問題を批判的に議論する上で極めて有効な手段となる。

3. 研究の方法

(1) 本研究では一次史料群から 17-19 世紀末までの植民都市「ボンベイ、カルカッタ、プリカット、マドラス」関係の史料を職業、教育、言語に焦点をあてて、現地(イギリス、オランダ、インド)の諸文書館で適宜収集した。また、メンバー各自が専攻分野を越境する形で議論を進めるため、インド都市社会史研究に必要な二次文献をインド洋世界史、英蘭東インド会社史、前近代インド史、イギリス帝国史、オランダ帝国史の視野から購入、互いに内容を紹介し、各自の研究経過とあわせて報告を行うための研究ミーティングを毎年定期的で開催した。これらの研究会には出来る限り毎回ゲストを招いて、持ち寄った情報がより広く共有されるように工夫した。

(2) 17 世紀後半から 19 世紀半ばの東インド会社管区史料(ボンベイ、カルカッタ)および帝国期のボンベイとカルカッタの職業や教育、言語の問題を社会史的に調査するには、主にイギリスの British Library と Oxford 大学における史料調査が不可欠である。さらに、お互いに越境する史料を発見するために、各人の史料調査に同行し史料の所在や特性について意見交換をした上で閲覧し、イギリスに関しては合同調査を行った。

この際オランダに渡り現地でも合同史料調査を行った。本課題のメンバー3名、のべ4度の海外調査を行い、史料収集を実施した。

(3) 英領インド統治に関する二次文献、特にボンベイとカルカッタにおける教育と官僚制に関する資料は、19世紀に出版された希少本も含めて日本に所蔵されていないものも多い。この場合は海外の古書の収集も視野にいれなければならないため、相応の額の図書購入費が発生した。また、東インド会社史、イギリス帝国史、西南インド史という異なる分野の越境的な共同研究であるため、膨大な数の文献の中から最新かつ重要なものを集めて北九州の九州工業大学において購入し、連携研究者、研究協力者はそれらを一覧することとした。

4. 研究成果

(1) 17世紀後半から19世紀半ばの東インド会社管区史料(ボンベイ、カルカッタ)および帝国期のボンベイとカルカッタの職業や教育、言語の問題を社会史的に調査するには、主にイギリスのBritish LibraryとOxford大学、インド諸文書館での史料調査が不可欠であるが、本研究のメンバーは先行の科研挑戦的萌芽研究課題でこれを実施し、越境する史料を発見するために、各人の史料調査に同行し史料の所在や特性について意見交換をした。特にBritish Libraryにおける史料調査ではコピーや写真撮影ができないことが多く、史料をマイクロフィルムのかたちで収集した。

(2) 先行の諸科研費課題採択時に収集したり、所在が判明したものを今回の調査研究対象とする。研究代表者の研究機関である九州工業大学に採択期間初頭にマイクロフィルムスキャナが設備備品として購入設置されれば、ただちに所属する研究機関での研究代表者の研究実施体制が整う。

(3) 本研究の研究成果として、まず、既に出版することが決まっている「女性を可視化した世界史」についての2冊の論文集を出版し、研究代表者、研究分担者、研究協力者がここに個別論文を発表する。さらに、史料研究についての論文を研究代表者、研究協力者が雑誌論文として公刊し、これ以外に個々のメンバーが植民都市社会史モノグラフを論文として発表する。

上述書における研究代表者の論文では、17世紀後半から18世紀半ば以前までの「商業」の時代と認識される次期に、居留地を中心として展開した会社の植民都市建設事業を会社史料から実証検討する。このことから19世紀半ば以降のイギリス帝国期のインド都市社会との接合・変容の状況を長期の時間軸で分析するための基盤を新たに構築する。さらに、世界規模の移動が本格的に始まっている

この時代の世界史の文脈に、EICによる女性植民事業のあり方を置くことで、植民地のジェンダー研究において重要な視点である女性の移動の問題を比較史的に検討した。このためインドの植民都市建設のためにイギリスから現地に送られた女性が主たる検討課題となった。

(4) 今後の課題として、史料論研究を本プロジェクトのメンバー3人で26年採択の基盤Cの課題を実施している、東インド会社期と帝国期インドの史料的な接続の課題があげられる。なお、今後分析を必要とする史料については、以下のように特定することができた。

British Library: India Office RecordにおけるPrivate Papersからイギリス東インド会社の親密圏に関わる社会史関連文書を閲覧、複写。特にBLでは以下の資料を重点的に収集する。

IOR: Home Miscellaneous series: H文書群

BLで必要に応じ、下記の史料も閲覧する。

[東インド会社行政職リスト]

Bombay:1712-1793

IOR:Z/0/6/37, D/91/93

(M.Moir, *A General Guide to the India Office Records*, London, British Library, 1988.を参照)

Bodleian Library, University of Oxford
カルカッタの社会史的再構築に重要な資料としての*The Calcutta Review*やその他の英語雑誌マイクロフィルムの閲覧調査

ハーグのオランダ国立文書館に、インドを含むアジア地域におけるオランダ東インド会社の活動に関係するが所蔵され、コロマンデル関連のものを中心に調査した。他に私文書の調査も当該文書間で並行して行い、イギリス東インド会社の私文書と比較検討した。

Nationaal Archief, Den Haag,

Geleynssen de Jong, 1.10.30

Stukken van Sweers, van Vliet c.s.,
1.10.78

Collectie Van Goens, 1.10.32

Archief van L.J. baron van Eck,
1.10.106

Collectie 121 Cort van der Linden,
2.21.040

(5) 今後の議論の焦点として、ここで柱となった「教育」「言語」「女性」「法と慣習」の問題が、植民都市社会の長期的な展開を考える際にきわめて重要な意味を持つ。従来の政治史の枠内で現地採用の官僚の歴史、とりわけ現地人工リートとナショナリズム台頭の関係、を扱ってきたが、社会史の実証研究は途上の段階である。セクシャリティや女

性・子ども・若者といった植民地社会の公共圏以外の領域、すなわち親密圏やその境界領域、に存在が見出せるような人々のあり方を、史料から実証的に明らかにするような植民都市社会史の確立は、植民都市における権力の姿勢を明らかにし、イギリス帝国史研究、近代インド史の論点にも新たな視角を提供する。

これまでのイギリス帝国史研究の動向から、植民地の公共圏で支配的な位置を占めたのは、地位と経済力のある白人の成人男性であったことは明らかである。それ故インドの都市史はこの事実を前提として政治史、経済史を中心に書かれてきた。現在求められているのは、それを前提とするかわりに、それ自体の歴史を問いなおすことであり、方法としての社会史的アプローチが不可欠になる。

(6) インド亜大陸におけるイギリスの植民都市に関する、社会史の実証研究の基盤となる史料研究と実証手法の確立が急務となってきている。特に、植民地社会の公共圏の外の親密圏やその境界領域に存在が見出せるような女性や子ども若者のあり方を史料から実証的に明らかにするためには、植民都市社会史研究に必要な史料についての研究基盤を構築する必要がある。植民都市内部で生まれ展開する社会的関係性の諸相である人種主義・民族主義、ジェンダーという問題群を見据え、その起源と変容を長期的に明らかにするため、イギリス東インド会社時代の史料群と帝国期の史料群から同一の社会的課題の実証的検討に必要な、異なる特徴を持つ時代別史料群の接合とその実証方法を提示することが本研究を発展させる上で今後の最も重要な課題となっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

和田郁子「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー訳注(1)』」『神戸大学文学部紀要』40号、2012年、pp.69-118、査読無。

水井万里子「近世イギリスにおける鉱物資源と財政 - コーンウォール産すずの先買1607 - 1643年をめぐって - 」『九州工業大学研究報告(人文・社会科学)』61号、2013年、pp.71-84、査読無。

Satoshi Mizutani, 'Author's Response' to 'Dr Amelia Bonea, review of The Meaning of White: Race, Class, and the 'Domiciled Community' in British India 1858-1930,

<http://www.history.ac.uk/reviews/review/1317>, *Reviews in History*, London, Institute of Historical Research, no.1317, 2012. 査読無。

和田郁子「アブル・ファズル著『アーイー

ニ・アクバリー訳注(1)』」『神戸大学文学部紀要』40号、2012年、pp.69-118、査読無。

和田郁子「要塞、市壁、『石の商館』」『史林』95巻1号、2011年、pp.110 - 139、査読有。

水谷智「アン・ストーラーの植民地研究と東アジアからの応答可能性」『人文学報』(京都大学人文科学研究所) 100号、2011年、pp.49 - 75、査読無。

Satoshi Mizutani, 'Review of Harald Fisher-Tine, Low and Licentious Europeans: Race, Class and Sabalternity in Colonial India (2009); Elizabeth Kolsky, Colonial Justice in British India (2010)', *Social History*, 36(2), pp.205-209、査読有。

[学会発表](計 4 件)

水井万里子「近世イギリスの鉱物資源政策」平成23年度九州史学会大会、2011年12月11日、九州大学(福岡県)

水谷智「『危険な雑種』としての下層パトラロック」現代インド地域研究・京都大学KINDAS、グループ1第6回定例発表会、2011年10月30日、京都大学稲盛財団記念館(京都府)

水谷智「内なる他者の規律化・隠蔽化と植民地教育」第13回洛北史学会大会、2011年6月4日、京都府立大学(京都府)

Satoshi Mizutani, 'The British Raj and its Colonial Politics of Whiteness', *Empire State of Mind*, 2011年5月27日、Lingnan University, Hongkong. 査読有。

[図書](計 1 件)

Satoshi Mizutani, *The Meaning of White: Race, Class, and the 'Domiciled Community' in British India, 1858-1930*, Oxford, Oxford University Press, 2011, pp.239.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水井 万里子 (Mariko MIZUI)
九州工業大学・工学研究院・教授
研究者番号：90336090

(3) 連携研究者

水谷 智 (Satoshi MIZUTANI)
同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授
研究者番号：90411074

(4) 研究協力者

和田 郁子 (Ikuko WADA)
京都大学非常勤講師
研究者番号：80600717